

P1-84 子宮頸癌治療中に発症した非細菌性血栓性心内膜炎の1例

熊本市立熊本市市民病院

平居裕子, 園田豪之介, 堀之内崇士, 上妻友隆, 市原憲雄, 大島雅恵, 石松順嗣, 綱脇 現

非細菌性血栓性心内膜炎(nonbacterial thrombotic endocarditis:NBTE)は悪性腫瘍などの全身性消耗疾患に伴う血液凝固異常から多臓器塞栓症を合併する。婦人科悪性腫瘍の中では卵巣癌の合併が多く子宮癌の報告は10例と稀で、また生前の確定診断は困難といわれている。今回、子宮頸癌を有し生前にNBTEと診断し得た1例を経験したので報告する。症例は42歳、子宮頸癌(扁平上皮癌, 非角化型)IVb期の診断で放射線療法(全骨盤照射+傍大動脈リンパ節照射)を開始。治療開始より約1ヵ月経過した頃、右上下肢脱力を自覚し精査目的に入院となった。発症時、意識は清で右片麻痺を認め、頭部MRIで左中大脳動脈, 右中大脳動脈領域などに高信号域が多発し頭部MRAでは左内頸動脈閉塞を認めた。当院神経内科にて治療が開始された。諸検査で塞栓源は認めず原因不明の脳梗塞と診断された。11病日に退院となったが13病日に右完全麻痺となり再入院。意識レベルJCS II-10と低下し頭部MRIで新たな梗塞病変を認めた。さらに14病日の経胸壁心エコーで僧帽弁に異常構造物を認めた。この時点でNBTEに伴う脳梗塞と診断し抗凝固療法が再開された。第35病日の経胸壁心エコーで僧帽弁の疣贅は消失し当科へ転科となった。NBTEの再発が懸念され以降の治療に関し化学療法も考慮した。しかし全身状態不良のため当科では新たな転移巣に対し放射線療法を選択し初回治療より4ヶ月後に原癌死となった。今回のように担癌患者が原因不明の脳梗塞を発症した場合はNBTEを疑い神経内科等への速やかなコンサルテーションが必要であると思われた。

P1-85 当科で治療した原発性腔癌31例に関する臨床的検討

新潟県立がんセンター新潟病院

笹川 基, 小島由美, 本間 滋, 児玉省二

【目的】多くの自験例をもとに、腔癌の臨床像を明らかとし、その臨床的取り扱いにつき検討を加えた。【方法】1988年からの20年間に当科で取り扱った原発性腔癌31症例を対象とし、組織型、臨床進行期、病巣占拠部位、腫瘍マーカー、初回治療法、再発部位と再発例に対する治療法、予後などにつき臨床的検討を行った。【成績】1. 扁平上皮癌20例、非扁平上皮癌11例(腺癌4例、平滑筋肉腫2例、腺扁平上皮癌, spindle cell carcinoma, 悪性リンパ腫, 悪性黒色腫, 悪性汗腺腫1例)であった。2. 臨床進行期分類(FIGO分類, 1974年)は、1期13例, 2期14例, 4期4例であった。3. 腔の上1/3, 後壁が好発部位と考えられた。4. 扁平上皮癌16例中6例(38%)で血清SCCが、また腺癌4例中3例(75%)で血清CA125が高値であった。5. 扁平上皮癌20例中14例, 非扁平上皮癌11例中8例で手術療法が初回の主治療となっていた。手術困難例では、扁平上皮癌には放射線療法が、非扁平上皮癌には化学療法が選択されていた。6. 局所再発例が多く、扁平上皮癌では放射線療法が、非扁平上皮癌では化学療法が行われた。7. 扁平上皮癌と非扁平上皮癌では予後に差異はなく、期別の10年生存率をみると、1期では77.8%, 2期では71.4%と比較的良好であるが、4期では0%と極めて不良であった。【結論】海外では初回治療法として放射線療法が選択されることが多い。今回の31例では多くの症例で初回治療として手術療法が選択されていたが、海外文献に劣らない成績が得られた。原発性腔癌では積極的に手術療法を選択することが望ましいと考えられた。

P1-86 当院で治療した20例の原発性腔悪性腫瘍について

北里大

葛岡美津穂, 小野重満, 新井 努, 川口美和, 新井正秀, 沼田 彩, 角田新平, 海野信也

【目的】腔原発性悪性腫瘍について臨床的傾向を調べた。【方法】1995年から2007年までに当院で治療した20例について臨床的検討を行った。【成績】平均年齢は62歳で、80.0%が閉経後であった。主訴は50.0%が不正出血で、無症状で検診で指摘された例が3例、帯下増量が4例であった。臨床進行期は0期が1例, 1期が7例, 2期が3例, 3期が8例, 4期が1例であった。組織型は扁平上皮癌17例, 非扁平上皮癌3例(明細胞腺癌1例, 悪性黒色腫1例, 粘液性腺癌1例)であった。扁平上皮癌17例中2例は子宮頸癌との重複癌であった。扁平上皮癌の5例, 非扁平上皮癌の1例に対し手術を実施した。高リスク症例4例に対して術後放射線治療を追加した。摘出不能例では8例に放射線療法, 4例に放射線療法と化学療法の併用療法(CCRT)を施行した。明細胞腺癌と悪性黒色腫の2例には化学療法のみ施行した。転帰がわかっている扁平上皮癌15例中, 5例が再発無く生存しており, 9例が死亡していた。1期2期の症例では腔癌による死亡例が3例であったのに対し(1例は治療後に乳癌で死亡), 3期以上の症例では8例中6例が死亡していた。【結論】3期以上の進行例では放射線治療でもCCRTでも局所コントロールが困難であり, これが予後不良の因子と考えられた。化学療法のみを施行した明細胞腺癌の症例は病理学的CRが得られ, 11年7ヶ月無病生存し, 11年6ヶ月で分娩となった。悪性黒色腫の症例は化学療法開始後11ヶ月にて死亡となった。腺癌の1期2期症例に対しては化学療法が行われるが3期以上の症例ではCCRT以上の治療方法を検討する必要があると思われる。